大切な狂気を君に捧ぐ

皆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大切な狂気を君に捧ぐ

【Ｎコード】
Ｎ５３６１Ｐ

【作者名】
皆

【あらすじ】
女は、ひきこもりで、少年は、普通の明るい少年だった。
その出会いは良い方向に向かうはずだったが、少年には母の婚約者による身体的・性的暴力の影が迫っていた。
＜それは、だれにもいってはならない＞

楓―1

その公園のブランコの上は、楓(かえで)にとって山の頂上にも匹敵した。
大きな進歩だった。
ずっと室内の窓から眺めるばかりだった小さな空が、頭上に果てしなく広がっている。
１５０センチにも満たない身長の彼女がブランコに座り込み、ゆらゆらと小さくその身を揺らし遊んでいる姿は、何の違和感もなく景色に溶け込んでいる。
しかし、楓は幼い少女ではない。
久しぶりの外気は、予想以上にひやりと冷たかった。
ぶるりと体が震えたのは、恐怖ではなく寒さのせいだと思う。
自宅マンションからほんの一歩の距離にある児童公園。
そこへ踏み出すのに、実に６年もの間迷い続けた。
出てこようと思ったきっかけは、ここ数週間の間、毎日見えるようになった学ラン姿のせいだ。
近くの中学校の制服だ。
それは楓の母校の、制服でもある。
その日も少年は、例にもれずにやってきた。
（……あ）
一瞬、目が合った気がした。
いつも少年が座っているブランコに、楓が座っているからだろう。
少しだけ迷ってから、少年はブランコには近づかずにベンチに腰掛けた。
楓が見えていた風景が狂う。
変わらないものは空と遊具くらいだと思っていたのに、毎日毎日変わらず少年はブランコに座り続けた。
その景色が、楓のせいで。
（狂う）

（狂ってしまう）
どうしようもない恐怖にかられて、楓はその場にへたりこんだ。
ずざっ、と膝を擦りむく熱い感触がして、主を失ったブランコが後方に大きく揺れる。
かと思うと、ガツン、と、戻ってきたブランコが背中を強打して、楓は思わぬ痛みに悶絶する事となった。
いや、思わぬ痛みではなく、容易に想像できる痛み、のはずであったのだが。
自分の行動に返る反応、反動、時の流れ、物事。
長く自分だけの世界に引きこもっていた彼女は、そんな当たり前の事すら忘れていたのだった。
「大丈、夫？……す、か」
突然の楓の行動に驚いたのであろう少年が、ベンチから腰を浮かせて怪訝さと心配さの混じった表情で問いかけた。
自分だけの世界では風景の一部のように物も言わずブランコと同化していた少年が動き、喋る。
それも当然、楓の頭にはなくて。
鬱陶しくない程度のショートにさっぱりと整えられた染めた形跡のない自然な黒髪はいつも見ていたが、存外はっきりとした目鼻立ちは遠目には見えなかった。
彼が多少の洒落っけを見せてウルフっぽくその髪をワックスで整えているのにも、遠くからでは気付けなかった。
新たな発見ばかりで、頭がパンクしそうになって。
真っ赤に染まっていく顔を止める術すら、今の楓にはないのだった。

巧―1

「お前のお母さん、再婚するんだって？」
びゅう、と厳しい秋風が吹いて、巧(たくみ)は飛んでいきそうに踊ったマフラーの端をグッ、と握り締めた。
ともすれば風の音で聞き逃してしまいそうになったそれをしっかりと拾い上げたのは、自分自身その話題に嫌というほど過敏になっていたからに違いない。
「するんだって」
「なんか他人事じゃねえ？……あ、昨日のテレビ見た？」
話題を振った友人は、呆れたように呟いてから、ころりと話題を変えてしまった。
興味が薄いのか、気を遣ったのか、どちらとも知れないが、恐らく前者であろう。
少年達はまだ中学生も半ばと言った年代で、子供ではないが、大人と呼ぶにはまだ早い。
「じゃあな」
分かれ道で手を振る間も、巧の表情は冴えなかった。
ずっと、母の眞由美(まゆみ)は女手一つで巧と、その妹の佳織(かおり)を育ててきた。
父の顔はほとんど覚えていない。
佳織が生まれてすぐ、両親は離婚をしたらしい。
その時巧は、僅か3歳だった。
自分の顔は母似だとよく評されるし、佳織は母似というほどでもないが女の子らしい柔らかな顔をしているのでそこに父の面影を見る事もない。
生活保護を受けながら、けして裕福ではない暮らしをしてきた。
母は夜の仕事に出掛け、ほとんど家にいない生活。
それでも巧は自分を不幸だと思った事はなかった。
眞由美は男勝りの性格で、時には父のように厳しかったが、その分

いつでもストレートな愛情を感じる事が出来た。
守るべき妹がずっと傍に居たから寂しくもなかったし、我ながら早いうちから母が不在がちなのは自分達の為だと子供らしからぬ理解を示していたと思う。
家族みんなで想いあって力を合わせて生きてきた。むしろ、良い家族だと思っている。
事態が急変したのは、佳織の突然の発病だった。
難病指定されている病が瞬く間に佳織を蝕み、長い闘病生活を余儀なくされた。
それでなくとも貧しかった暮らしは一気に困窮し、眞由美は朝から晩まで一日中働きに出掛け、顔を合わせる事すら難しくなった。
巧は、一人考えていた。
――俺がこの家で唯一の男の子なんだから、皆を守らなきゃ。学校をやめて、働こう

再婚話が突然振ってわいたのは、そんな折の出来事だった。

眞由美は外見も言動も派手なので、男性にはよくモテるようだった。
惜しみなく贈られるブランド品の数々を質に入れて生活の足しにしていたほどだ。
水商売のせいでいつでも厚化粧だが、化粧を取ったって十二分に美人なのだ。
それは、巧だけが知っている秘密で、密かな自慢だったりも、した。
いつ再婚話が出てもおかしくはなかった。
頭では理解していても、感情がついてこない。
自分がしっかりしなければと早いうちに成熟したようでいて、母が大事だからこその年相応な幼さが母の再婚を認めたくなかった。

「巧君？」

寄り道するかどうか、迷って立ち止まったそんなとき、聞きなれない声が巧の背中を呼び止めた。
「……？」
振り返った先には、年の頃四十代前半といった所だろうか、縦にも横にもでかい男がその背を小さく丸めて眉を垂らし、口元にだけ気弱な笑みを湛えて佇んでいた。
巧は春の身体測定でようやく１６０センチまでもう少し、という所だった。
その巧が仰ぐように見上げねばならないのだから、男は相当上背があるのだろう。
しかし、だらしなくズボンのベルトの上にでっぷりと乗っかる肉が見てとれるほどに肥えた男からは、上背に似合わぬ弱々しいオーラばかりを感じる。
「あ、ごめんね、急に呼び止めて…。僕は、茂木（もぎ）　武志（たけし）です。眞由美さんから話を聞いていないかな」
名乗った男に、巧の目がゆっくりと見開かれる。
武志、武志、武志。
最近、いやというほど母の口に上る名前だ。
忘れたくとも忘れられるものか。

『私、武志さんと再婚しようと思っているの』

あの台詞の衝撃と言ったら、そりゃあ、頭痛がするほどひどかったのだから。
「……あんた……貴方が、武志さん、ですか……」
「良かった！やっぱり聞いてたんだね。ごめんね、きちんと挨拶しようと思ってたんだけど、姿を見かけてしまって。眞由美さんに面影が似ているから、もしかしてと思った
ら、我慢が出来なくて」

人の良さそうな笑みでハンカチを取り出し、武志が額の汗を拭く。
この北風の中で滲む汗は体躯のせいだけではなく、緊張しているのかもしれない。
どんな男なのだろう。
ずっと思ってた。
このいかにも野暮ったい男が、母と結婚する。
幻滅と、少しの安堵と。
複雑な感情が胸をざわつかせる。
「……あの、すみません。俺、友達と約束してて。待ち合わせ場所向かうとこだから」
俯いて告げると、慌てたように武志がハンカチを取り落としたのが下げた視界の先に映った。
「あ、あぁー…ごめんね。あのね、今日、一緒に夕飯を食べに行きましょう。眞由美さんは帰ったら話す予定だったんじゃないかな。佳織ちゃんの顔を見てからだから、夜八

時くらいになると言われてるんだ」
武志の口から妹の名が零れる。
また、胸がざわついた。
（母さん、佳織の名前まで教えたのか）
【当たり前、結婚するんだから】
（佳織の名前をお前が呼ぶな）
【この人なら、佳織の事も大事にしてくれるかも】
胸の中で自分が会話する感覚など、初めてだった。
巧はグッと拳を握り締めて、逃げるようにそれじゃ、とだけ言葉を残しその場を立ち去った。
いつもの公園に行こう。
気付くと足がそこに向かった。
妹の病気のこと、就職のこと、再婚のこと、増えるばかりの悩みを消化しきれなくなって、近所の公園でぼんやりする事が多くなった。

友達には相談できない。
友達は息が抜ける存在というか、自分が子供で居られる相手であって。
自分の悩みを話すには、巧にとっては誰もかれも子供すぎるように思えた。
一人でいたいはずの公園で、少女とであった。
不思議と彼女の存在は不快ではない。
少女、かどうかは、わからないのだが。
いつも彼女は大きなマスクで顔を隠しているので、勝手に巧が少女なのだろうと決めつけているだけだ。
彼女に会いたい。
なぜか、そう思った。

楓―2

最近、ようやく寒さというものを思い出してきた。
最初にこの公園へ飛び出したとき、楓はセーターにズボンといういでたちだった。
さすがに懲りて、上着を着て、手袋を履き、今日はマフラーも巻いてみた。
刻一刻と冬の気配が近づいている。
いつものようにブランコに座り込んでいたら、少年が現れた。
楓が外に出るきっかけとなった少年。
学ラン姿の少年。
初めて会ったあの日、少年と楓は一言二言言葉を交わした。
初対面の人間と言葉を交わすなど、楓自身も信じられなかったが、なぜかすらすらと言葉が出てきたのを覚えている。
未だに名前すら知らないが、ここで楓は毎日少年を待っている。
園内を見回す視線に気付いて思わず手を振ろうとして、引っ込めた。
（少し、様子が、いつもと違う？）
少年は息を切らして、何か苦悩するように額を押さえてから、ブランコの楓に気付いてゆっくりと歩み寄ってきた。
「もみじさん」
呼ばれる名前にいつも笑ってしまう。
初日に楓がきていたセーターが、紅葉の柄だったのだ。
以来少年は、勝手に楓の事を“もみじさん”と呼ぶ。
植物学としては、もみじとかえでに違いはないと聞いた事がある。
もみじさんは、まさに楓にうってつけのあだ名という訳だ。
「こんにちは、学ラン君」
意趣返しという訳ではないが、楓は少年を学ラン君と呼ぶ。
元々なんとも不思議な出会いで、名前も知らない不思議な間柄だから、これでいいのだ、と楓は思っている。

むしろ他の誰にも呼ばれないであろう互いの呼び名が秘密の合言葉のようで、少し面白い。
「なんか、元気、ないですか？」
隣のブランコに座り込んだ少年へと問いかけると、彼はキィ、と勢いよくブランコをこぎながら空を仰いだ。
「わかる？」
「うん、なんか、変だから」
「……もみじさんは、親が好き？」
突然問われた台詞に、楓はぱちくりと目を丸くしてしまった。
きっと少年相手でなければ、正解を探して、黙り込んでしまっただろう。
しかし、少年相手だと、悩まず言葉が出た。
「好きです。私の味方、親なの。大好き、です」
少年は暫く黙ってブランコをこいでから、小さく少し幼い笑みを浮かべた。
「俺も好き。恥ずかしいから、内緒ね」
楓が感じているような空気を、少年も感じているようだった。
他の相手だと出てこない言葉が、互いの前だと不思議と素直にこぼれ出る。
「……母さんが、再婚するんだって。好きだから認めてあげるべき？好きだから認めたくなくてすげえ微妙な気持ち」
更に高く高くブランコをこぎ、少年はキィキィ軋む音にまぎれさせるかのように小さく呟いた。
それでも、必死に耳を欹てていた楓にはしっかりと届いて、うん、とブランコの鎖を握り締めて少しだけまねするようにブランコをこいだ。
「……うちのお母さんは、私を守ってくれます。そのお母さんは、風邪を引いたら、お父さんに頼る、よ」
考えながら返すと、キ、と少年のブランコが止まった。
すとん、と楓の方向へ横向きに座り込んだ少年が楓を見つめる。

「俺じゃ駄目なのかな」
「頼ってくれます、か？お母さん」
「……どうだろ。敵わねえなーって思う事ばっかり。そういえば、母さんの弱気なところ見たことない」
呟いているうちに、少年なりに結論が出たらしい。
チェーッ、と舌打ちとともに、少年がブランコを飛び降りた。
「俺が大人になるまでは、力貸してもらおうかな」
「う、ん…学ラン君の、お父さんになる人でも、あります。……仲良くできたら、いいね」
目を泳がせながら、楓はぎこちなく告げる。
少年は、じっとそんな楓を見つめてからはにかむように笑った。
「もみじさんに言われたら、俺もそう思えるかもしれない。じゃあまたね！寒いから、風邪ひくなよ」
元気よく手を振って走り去っていく少年に、慌てて手を振り返して、楓は小さく笑った。
両親以外に風邪を心配してもらうのも随分と久しぶりだ。
「マスク、してるから、大丈夫です、よー…」
既に届かないであろう言葉を零した途端、自らの言葉にズキンとした。
マスクをしているのは風邪のせいでも風邪予防のためでもない。
ズキンズキンと鼻の横がうずく。
震えが急に全身を襲って、楓は慌てて立ち上がった。
（寒いから、だね、学ラン君）
逃げるように楓が走り去って、公園には誰も居なくなった。

巧―2

うまくこなしている、と、巧は思う。
佳織の変わらぬ容態を見に病院へ行った帰り、武志の言っていた通り母が切り出した。
『今日、あんたに武志さんを紹介しようと思ってるんだけど』
もう会ったよ、と、なんとなく言えなかった。
自分なりに最高の立会いを演出しようとしたのかもしれない。
初めてみた武志に、がっかりした気分を隠せなかったのは本当だ。
だが、次に会う武志は、巧にとっては二度目である。
笑顔で挨拶をした。
笑顔でファミリーレストランへ行って。
笑顔で食事をしている真っ最中という訳だ。
武志と会話を交わすと、眞由美は嬉しそうだった。
武志自身も、その人の良さそうな笑みに安堵と嬉しげな様子を少しずつ色濃く露にしている。
これでいいのかもしれない。
（もみじさん、ありがと）
頭の中で、名も知らぬ少女へと礼を告げる。
公園でほんの少し言葉をかわしただけではあったが、あれから嘘のように心が落ち着いていた。
武志の人の良さそうな笑みに苛立ちすら覚えていたのが、今は安心感がわく気さえする。
「武志さんと巧が仲良くしてくれそうで良かった」
「うん、僕たちは大丈夫だよ、眞由美さん。だから、せめて週の半分だけでも僕に任せて」
「え？」
突然知らない会話が交わされて、巧は顔を上げた。
武志が笑顔のまま少し眉を垂らす。

「あ、ごめんね、巧君。眞由美さんが朝も夜もなく働いてるのは知ってるよね。このままじゃ体を壊してしまうから、結婚が決まる前からでも構わないから僕にも佳織ちゃん

の看病や、君の夕飯とか…家事を分担させてってお願いしてたんだよ。一人暮らしが長いから、これでも料理も得意なんだ」

「……」

初耳だったことにムッとしたのは勿論、勝手に言い切られた台詞にあからさまに巧の顔が歪んだ。

何も、母が無理をしているのは看病をするためだけではない。

何よりも、金がないのだ。

だからこそ、巧も学校をやめて働くことまで考えていたのに。

表情に出たのを察してか、フォローするように口を挟んだのは眞由美だった。

「巧、武志さんは全部わかった上で言ってくれてるんだよ。巧が学校辞める事はないってすごく心配してくれて。お給料も入れてくれるんだって。武志さんはね、会社でも幹

部を任されてる偉い人なんだから」

「……」

思わず再び黙り込んだのは、勿論ムッとしたからではなく、その言葉に驚いたからだった。

再婚。事実にばかり頭が向かっていて、現実的な身の回りの変化に思考が及ばなかったのはやはり幼さゆえか。

一人稼ぎ柱が増えるという事は、余裕も出るという事で。

完全に学校を辞める気だった巧は今更、本当に今更そんな事に気がついたのだ。

「何驚いてるの？いい大人同士が結婚するんだから当たり前の事でしょう」

「あ……う…ん」

それではまさに願ったり、な状況になるという事か。
拍子抜けしてしまって、曖昧な返事しか出来ない。
「結婚自体は、佳織ちゃんが良くなってからって思ってるんだ。だけど、それまでも…宜しくしてくれるよね、巧君」
優しげな口調と笑みで、武志が言う。
案じてくれたという武志。
ここで意地を張るほどは、巧とて子供ではない。
「……有難う、茂木さん」
「武志でいいよ。そう呼んでくれないかな」
「……武志さん」
その会話に、横でいかにも眞由美が嬉しそうにしたのがわかった。
喜んでいる母を見るのは、当然悪い気分ではない。
「良かった！有難う武志さん、巧！……じゃあ…急には休めないから、明日は早速巧の夕飯お願いしていい？」
「うん、勿論だよ。巧君、何が食べたい？」
「え……俺、……いや、好き嫌いとか、別に、ない、し…から、大丈夫です」
とんとん拍子に進む話に、やはり少し胸がざわついたが、少女のようにはしゃいでいる母を見て異論を唱えるようなことは既に出来なかった。
今の巧は、少しだけぎこちない愛想笑いで、武志と視線を交わすのが精一杯だった。

楓―3

「今日、新しい親父候補と二人で飯食うんだ」
いつものように公園に現れるなり、少年はそんな台詞を言った。
照れと、戸惑いと、僅かな気落ちが見てとれる。
その気落ちを、楓は緊張のせいだろう、と思った。
「良かった、仲良く、できそう、な、カンジ…」
「……に、見える？」
「じゃ、ない、ですか？」
問いかけると、少年はブランコに座り込んで子供がむずがるかのようにゆらゆら左右に揺れて口を尖らせた。
「まだ複雑だ。でも、ま、いい人っぽいし」
「どん、な？」
「ん？親父候補？太ってて、背が高くて、なんか気弱そうな人。……けど、まぁ、優しそう、とも言える、かな」
饒舌なのは、好意的な証拠だろう。
楓は小さく笑って自らも少しだけブランコをこいだ。
「なんか、想像できる、カモ」
「でしょ？俺も想像できる」
「学ラン君は、想像じゃなくて知ってる、じゃない」
「あはは、そりゃそうだ」
二人小さく笑いあうと、少年ははぁっ、と何か吹っ切れたような息を吐いて空を仰いだ。
「どんどん日ィ短くなるね。もみじさんち近いの？」
「ん、ウン、すぐ、そこ。なの」
「あ、そっか、なら安心だ。暗くなってきたら、公園に一人でいるのって危ないし」
案じるような台詞を言う少年に、楓は少しだけ俯いて笑った。
「私は平気、だよ、お」

「なんで？実はすげえ強い、とか」
「ううん、バケモノ、なの」
無邪気に問いかけてくる少年のおかげか、自ら言い放った台詞は不思議と自分を傷つけなかった。
キ、とブランコのゆれを不自然にとめたのは、少年の方だった。
「何それ？誰が言ったの？」
「え……」
真剣な顔に、楓の方が戸惑う。
「わ、ワタ、シ」
「…なんで、バケモノなの？」
「……」
フェアじゃない、のかな。
楓はぽつりと心の中で呟いた。
自ら聞きだした訳ではなくとも、少年の家庭事情をいつの間にやら教えてもらった状態になっている。
「あの、ね。……私、鼻の横に、大きな傷が、あって」
「……マスクの下？」
「う、ん、そうだよ」
触れたくない会話だった。
思い出したくも無い出来事だった。
家族でさえ、その話題に触れないようにしていた。
名前も知らない少年に問いかけられて、楓はその話題を自らすんなりと口にしている。
「なんでそれが、バケモノ？」
「え、……だって」
「見せてって言ったら、……嫌、かな」
「……」
その申し出には、さすがに戸惑った。
困って俯いてしまうと、少年がキィ、とブランコから降りた音がした。

「もみじさんは葉っぱのヨウセイだ」
「はぁ？」
「……とか、勝手に思ってただけ、だけど」
思わず顔を上げると、少年はカァッと顔を真っ赤にして、掌で口を覆って顔を逸らしてしまっていた。
なんとも少年らしいその様子に、ついつい小さく笑ってしまう。
「笑うなよ！！とにかくバケモノとかそんなんじゃないから。…って俺は思ってるかんね。絶対」
「……」
「ごめん。見せてとか言って。怒った？」
「あの、ね」
「うん？」
中々、言葉が出てこない。
これは昔からの楓の癖で。
言葉に詰まった時、ようやく少年との会話が心地良い訳がわかった気がした。
少年はじっとまっすぐに人を、楓を、見る。
その瞳を見ていたら安心して、自然と言葉が口から零れるのだ。
「あのね、…ありがと、ね。あの、嬉しい…ね、嬉しい」
必死に伝えて、それから、楓はふわりと笑った。
顔半分を隠してしまっているマスク越しにも、柔らかくその目元が緩んだのが見えたらしい。
さきほどとは若干違う意味合いで、少年が照れてみせたが、楓はそこまでは気付けない。
「うぁ、もうこんな時間か。暗くて時計見えなかったや。じゃあ俺、武志さんが待ってるから」
恐らく無意識であろう、少年が名前を口にした。
タケシさん。
きっとそれが、少年の新しい父親となる予定の彼の人の名前なのだ。
なんだか微笑ましくなってしまって、また楓の表情が緩む。

「また、ね」
「うん、またね」
挨拶は、さようなら、ではなく、また。
どちらかが意識した訳ではないのだが、どちらもその言葉を使う。
うまくいけばいいな。
見えなくなった背中をいつまでも追いかけて、ポツリと楓はそんな独り言を零した。

巧ー3

男同士裸の付き合いはどう？
そんな武志の誘いで、夕食後巧と武志は二人で銭湯へと足を運ぶ事となった。
「やっぱり風呂は食った後にゆっくりと浸かるのがいいね」
脱ぎながら武志はひどく上機嫌だった。
巧もまた、少し自分の気分が弾んでいるのを自覚していた。
夕食に武志が作ったハンバーグは下手すれば母の作るものよりも美味かった（眞由美はあまり料理が得意ではない）。
アパートの体育座り状態で収まるのがやっとの小さな湯船の何倍、何十倍ありそうな大きな風呂も、たまに入るのであれば本当に気持ちがいいものだ。
「風呂に温まるのは食う前のが体にはいいって聞いたけど」
「へえ、そうなんだ。どうして？」
「理由は……忘れました、けど。…駄目なのは食った直後とか、だったかな…」
「物知りだね。理由もわかったらまた教えて」
一足先に裸になった武志は、腰にタオルを巻いて笑顔で言った。
彼に追いつこうと慌てた巧ははい、と返事をするのが精一杯で、笑みを返す余裕すらない。
ごくありきたりな銭湯には浴槽が二つと、洗い場が申し分程度。
昔ながらの古めかしい作りのためか、他には客が数人という程度だった。
「おいで、巧。背中流してあげるから」
突然呼び捨てで名前を呼ばれて、ギョッとした。
馴れ馴れしいな、と少し不快感が湧き上がったが、それを顔に出す訳にもいかない。
とりあえず素直に座り込むと、後ろに並ぶ状態で座り込んだ武志が

丁寧にシャワーで巧の体を流し始めた。
「なんかいいよな。こういうの憧れてたんだ」
「……こういうの、って」
「父子の交流みたいな。うちの親父は……酒を飲んでは暴れるような奴だったからねえ……」
何気ない風で零された言葉は、シャワーや浴槽から聞こえる水の音にかき消されていった。
ほどよいシャワーの湯温に心地よくなっていた巧もまた、ぼんやりとただ彼の口から零れる言葉を聞いていた。
「お湯熱くないかい？」
「大丈夫です」
「案外筋肉ついてるんだねえ」
不意に二の腕を揉まれて、ついつい巧は小さく肩を竦めた。
肩越しに振り返ると、穏やかな笑みの武志もまた覗き込むように顔を近づけてくる。
思った以上に距離が縮まり、巧は再び前を向かざるを得なかった。
「何かスポーツやってたの？」
「……、…あ、はあ。小学校のとき、…学校のクラブで野球を…」
「だからか！今も野球部？」
「いや…今は……クラブも結構金かかるし」
俯きがちに答えると、ほうと感嘆に似た吐息を武志が漏らしたのが聞こえた。
「佳織ちゃんのためか。君は本当に素晴らしい子なんだね」
そんな風に手放しで褒められてしまうと、どう反応して良いのかわからない。
黙り込んでいると、腕を揉んでいた武志の手がつつ、と二の腕から肘、そして脇の方へと滑った。
（え？）
気のせいだろうか、と一瞬の逡巡をあざ笑うように、指先は背中を辿る。

触れるか触れないか、微妙な距離を保って、指先はうなじへと滑る。
（……）
ドクドクと脈が速くなるのを感じた。
何かを確かめるような指の動きが意図するものが、巧にはわからない。
「……ぁ、の、武志さん」
「しなやかで綺麗な体だね。俺みたいな汚い体にはなるなよ」
毛で覆われたへそから下の辺りの腹をバシンと自ら叩いて、ふざけたように武志が笑う。
態度におかしなところは無い。
しかしその指先は、奇妙な動きをし続ける。
「年の割りには、体毛が薄いんだね」
うなじから、首筋。耳の裏を少し擽って、鎖骨へと。
その手がいよいよ前側に回ろうとした時、堪らず巧は勢い良く立ち上がった。
「うわっ」
浴室用の安定した椅子がひっくり返るほどの勢いで、武志はいかにも驚いたようなぽかんとした表情を浮かべていた。
「どうしたの？」
笑いながら問いかけられて、巧は拳を強く握り締めて目を逸らす。
「なんでもないです」
自分でも、その感覚がなんなのかよくわからないが。
屈辱とか、嫌悪とか、よくないものであるのは確かだ。
まるで物凄い辱めを受けたかのような気分だった。
銭湯である以上裸でいて当たり前なのに、急にひどく惨めな姿を晒しているような気がしていた。
「のぼせた？……ちょっと休んでるといいよ、僕はサウナとかにも色々行きたいし…ゆっくりしよう。まだまだ時間も大丈夫だしね」
のんびりと告げて、武志は何事も無かったように髪を洗い始めた。
こちらを見ていないのがわかって、思い切りその顔を睨みつける。

本当は、わざとらしく離れた場所に座りたかった。
しかし巧に出来る事といえば、倒れた椅子をもう一度起こしてそこに座り込む事しかなかった。
（気持ち悪い）
この嫌悪がどこから来るのか、明確にはわからない。
が、一刻も早く風呂を出て、服を着たいと思った。
心地よいはずの銭湯に心から辟易したのはこの時が初めてだった。

楓ー4

「仲良く、出来なかった、の？」
いつものように児童公園へと現れた少年に、ついつい楓はそんな問いを向けた。
というのも、ブランコに座り込むなり、いかにもどんよりと暗い表情で少年が俯いてしまったせいだ。
「……よく、わかんねー……」
呟くように零された言葉に、それ以上何を聞けば良いのかわからず、楓は黙ってブランコを漕いだ。
「気持ち悪いのって、やっぱりまだどっかで母さんを取られると思ってるからなのかな」
すると沈黙が居心地悪かったようで、少年の方からそんな話題を切り出してきた。
「気持ち悪い……？」
「なんか、気持ち悪い。それが一番近い」
「んん」
思わず考え込んで、楓は小さく唸る。
「今日も、辛い……？考えると気持ち悪い、とか？」
「え、あ、今日は…母さん休みだからまた病院寄ってから三人で飯。思い出したら気持ち悪いっていうほうがしっくり」
「んんん」
ますます考え込んでしまう楓に、不意に小さく少年が笑った。
「アハ、ごめんごめん。別にそこまで深刻に考えてくれなくていいよ」
「でも……」
「なんか、もみじさん見てたら和んだし、いーよ別に」
何気ない風で言われたその台詞に、妙に照れくさくなった。
今度は考えこんでいるせいでなく、押し黙る。

キコキコと申し訳程度にブランコを揺らしながら、少年は小さく肩を竦めた。
「もうちょっと色々話して、慣れてみるべきかぁー……」
「ん、そ、だね。共通の趣味、とかは…」
「わかんね。趣味か……ご趣味は？とか、お見合いみたい」
自分で言ってぶはは、と噴出す少年を見て、つられて楓も小さく笑う。
「お母さん、とは、どう、知り合ったのかな」
「え？」
「……」
「あぁ、二人の馴れ初め？馴れ初めか……聞きたいような、聞きたくないような」
複雑そうに呻く様子を見て、失敗したかな、と楓の眉が垂れ下がったが、うん、とその空気を払拭するように少年が力強く頷いた。
「そうだな、そういうのって後回しにすればするほど聞きづらくなりそうだし。丁度良い機会かな」
「う、ウン、そ、だよ。会話の糸口になる、カモ……」
「確かにな！ありがと、もみじさん」
満面の笑みで礼を告げられて、楓の胸もあったかくなる。
トクン、トクン。
ときめきというほど早くなく、平静というほど静かではない。
少年といると感じる心地よい胸の高鳴り。
「俺達の馴れ初めってさ」
「……え！？」
「あっ、ゴメ、ン……」
突然の言葉に思わず大きめの声で聞き返すと、途端に少年は顔を赤に染めた。
「俺達の、出会いってさ。人に聞かれたらどう教えればいいか困るなーって、ふと」
ゴホン、と咳払いをして改めて告げられた言葉に、確かに…と楓は

少し首を傾げる。
「学ラン君は、私の、妄想の世界に居たの」
「へ？」
「えっと、童話を…」
「何？」
纏まらない言葉に少し黙ってから、もじもじと楓は足で地面を蹴った。
「童話、トカ、お話を、作るのがすきで。学ラン君は、毎日決まったような時間に公園に来てたから、私の、妄想の、餌食、に。」
言っているうちに、なんだか妙な台詞だなぁ、と自覚した。
少年にとってもそれは、妙な台詞として伝わったようで。
「何妄想の餌食って」
「……」
「変なの！」
けらけらといかにも少年らしく、素直な笑い声を彼があたりに響かせ始める。
恥ずかしかったが、最初は暗い顔をしていた少年が楽しそうに笑っているのが、楓には嬉しかった。
「童話っていいね。もみじさんにぴったりかも」
「そ、そう、思う！か、な」
「うん、いつか作ったら、俺にも読ませて」
「う、うん…あ、でも、恥ずかしい…」
「人を妄想の餌食にしといて今更そんな事言うなよ」
そんな台詞に、二人で笑いあう。
吐き出す息が白い事さえ、気にならなくて。
いつも、二人で過ごす時間は不思議にあっという間に過ぎていくのだった。

巧ー4

この前とは違うファミリーレストランで、巧はメニューとにらめっこをしていた。
４人掛けのボックス席で、向いには眞由美。なぜか隣に、武志がいる。
迷わず巧の隣を選択した武志に、眞由美はひどく嬉しそうにした。
だから、例の気持ち悪さがまた蘇りそうになったけど、巧には文句など到底言えなかった。
「巧、まだ決まらないの？珍しいね、あんたが優柔不断になるの」
「あ！」
眞由美にひょいっ、と広げていた大きなメニューを取り上げられて、巧は密かに眉を垂らした。
バリケードというほど大袈裟なものではないけど。
武志との距離を僅かでも遮断する手段であったのに。
「ちょうど今、決まったとこ。……俺、ナポリタンでいいや」
「じゃあ私はハンバーグね。武志さんのハンバーグには敵わないと思うけど？」
眞由美が大袈裟に片眉を上げて口にした。
武志のハンバーグが美味しかったと教えたら、それ以来ずっと、眞由美は自分だけ食べられなかった事に拗ねているらしい。
「ははは、次の眞由美さんの休みは家で過ごそうか。僕、ハンバーグを作るよ」
「本当！巧ったら自慢するんだから、夢にまで出たよ私。絶対だからね」
「そうなのか。それは光栄だ」
あ、と小さく頭の中で呟く。
多少なりとも大袈裟に話を誇張した眞由美にだ。
美味かったと一言告げただけなのに。

一々細かい事にも目くじらを立ててしまうのは、どうしてもわだかまりが拭えないままのせいだろうか。
「僕はドリアにしようかな。それじゃ、注文するよ」
武志が店員を呼び寄せ、全員分のオーダーを告げる。
タイミングの問題であろうが、不自然な沈黙が落ちて、少しだけ巧は焦った。
それを気まずく思うのは巧だけなのかもしれないが、無言になると感情にばかり気持ちが引きずられそうでいやだった。
早く、その違和感を払拭したい。
巧は夕方に公園で少女と交わした会話を思い出し、億劫な気持ちを無理矢理押さえ込んで口を開いた。
「あのさ、二人は……どうやって、知り合った、の？」
「へぁ？」
突拍子もない問いかけに、眞由美がなんとも間の抜けた声を漏らした。
武志もまたぽかんとしてから、二人が目を合わせて笑う。
（なんだよそのアイコンタクトは）
一々ムッとしかける自分を必死に宥めるのが我ながら滑稽だ、と巧は思う。
「武志さんが店に来たの。変わってるんだからこの人。飲み屋なのに、一滴もお酒飲まないの」
「あ、いやぁ、僕はそのう、酒が苦手で」
「そのくせ羽振りはいいし、女の子達には好きなもの振舞ってたしね。あまりに変わってるんで、強烈に印象に残っちゃってさ」
けらけら笑って、眞由美が言葉を弾ませる。
武志は照れくさそうな、嬉しそうな表情でハンカチを取り出し、額の汗を拭いている。
「僕の方は、もう……完全にやられちゃって。眞由美さん、本当に綺麗だったから」
「ちょっと！やめてよ！褒めても何も出ないんだからね」

盛り上がっている二人を見て、寂しさと嬉しさが同時に巧の胸中を去来する。
「それからね。足繁く通ってきてくれる武志さんと自然と距離が近くなって、アフターで二人だけでのみに行くようになったりさ」
「いやぁ、眞由美さんは巧君と佳織ちゃんを本当に大事にしてたからね。アフターには誘っても滅多に応じてくれなかったじゃない」
出会い方としては、なんとなく、納得、と言った所だった。
運ばれてきたパスタとオレンジジュースに早速手を伸ばすと、ずずず、と音を立ててジュースを啜る。
「未だに僕は信じられないよ。眞由美さんが結婚してもいいって言ってくれたこと」
「熱意に負けただけ。さ、食べよう」
全員分の食事が揃い、さっさと眞由美が会話を切り上げた。
なんとなくそこに違和感を感じたのは、自分だけだろうか。
巧はちらりと隣に座る武志を盗み見た。
普段と全く変わらぬニコニコとした笑みで、スプーンを手にしている。
一瞬の違和感に気付いたのは、自分だけだ。
そのことに、優越感に似た心地よさを僅かに覚えた。
まだ、母に一番近いのは自分だ。
そんなする必要もない再確認が出来たようで、気分がいい。
「えーと武志さん、趣味は？」
気分の良さにかまけて自分から問いかける。
これもさきほど少女との会話で上がった話題だった。
「はっ？」
「……なーにあんたそれ、お見合いじゃないんだから」
「……」
浮かれて会話を続けるべきではないな。
完全に外したのを察して、巧は少し気恥ずかしさを覚えながら目の前の料理に集中する事でそれを誤魔化す事にした。

楓―5

久しぶりに、熱が出た。
前は一日中ベッドの中から出ないような事もあったから、毎日が体調不良のようなもので。
それを克服できたあとも、ただぼんやりと室内で時間を過ごしていた。
それが最近では、マフラーと手袋と、上着を用意して、お昼にきっちりご飯を食べて。
そんな用意をしない事が新鮮で、いつの間にか公園へ赴くのが日常になってしまっていたんだなぁと不思議な感じがした。
「楓。りんご剥いたよ」
母親の声に、楓はベッドに寝転がったままゆっくりと瞼を上げた。
優しげな笑みで、母親がベッドの傍に腰を下ろす。
「りんごが無くて、買いに行ったの。それで実感したよ、体調崩すのちょっと久しぶりだったねえ」
「うん、そうだね」
「最近なんて、毎日外に出掛けるでしょう？」
「知ってたの？」
「わかるよ」
母は夕方までパートに出ているので、楓の外出時間にはマンションに誰も居ない事の方が多い。
それでも、炊事洗濯全てを担当している母には、楓がどういう行動を取っていたかなんてある程度はお見通しなのだろう。
「何処に行ってるの？」
「すぐそこの公園だよ」
「そっか」
リンゴを差し出してくる母が、少しだけ眉を垂らしたのがわかってしまって、楓はそっとリンゴを受け取るとそのまま少し俯いた。

「ごめんね」
１４の時、楓は不登校になった。
それから、既に６年。
もう、成人の年を迎えている。
学ぶ機会はなくなっても、ずっと家にいても、それでも人は何かしら成長していくものらしい。
わかっている。
今寝ているベッド。食べているリンゴ。着ている服。
それらは魔法のようにどこからかわいて出るものではない。
お金と引き換えに、ここにある。
そのお金も勿論魔法のように空から降ってくるものではなくて。
自分ではない両親が、苦労と引き換えに手に入れているものなのだ。
「いいんだよ、楓」
「……」
「いいんだよ、無理しなくても。楓が元気でいてくれるだけで十分なんだから」
母の優しい笑みは崩れる事はない。
その瞳の奥に悲しげな色を見つけて、楓はもう一度ごめんね、と心の中で呟いた。
その悲しみは、楓を責めるものではない。
むしろ、自分を責めているのだろう。
家族は、いつでも楓の味方だった。
自分は弱い。自覚がある。
全ては自分の弱さが巻き起こしたものなのに、父も母も救ってやれなかった事を嘆いているようだった。
自己嫌悪に押しつぶされそうになっても、けして呆れない、怒らない。
それが最近では逆に、じりじりと楓の背中を追い立てる。
年を重ねるごとに焦燥は強くなっている。
だが、きっとそれは確かに背を押すもので、追い詰めるものではな

いと思う。
時間はかかるけど、弱い自分にはうってつけなのだろう。
楓はそこまで考えて、小さく自嘲した。
弱さを言い訳にし続けて、もう何年たったんだろう。
「とにかく今日は、ゆっくり休みなさい。外に出るのもだーめ」
「はい、わかった」
とりあえずその台詞には素直に返事をして、しゃく、とリンゴを齧る。
満足そうに立ち去っていく母の背中を見つめる。
身長があまり伸びなかったので、背丈が追いついたという事はけしてないはずなのに、なんだか少し小さくなってしまったような気がした。
自分のためではなく、家族のために。
もう少し、あとほんの数歩。…出来れば、ずっと。
自分の足でしっかり歩いていきたい。
一人で歩いていけるだろうか。
隣に誰かが居てくれたら、とても心強いのに。
そんな事を考える楓の頭に、公園の少年の姿が一瞬浮かんで、緩やかに掻き消えていった。

巧―5

（あれ？）
キィキィと戯れのように揺らし続けていたブランコをとめて、巧はゆっくりと辺りを見回した。
いつも少女が現れる時間はとっくに過ぎている。
ブランコを握る手はすっかりかじかんで感覚がなくなっていて、結構な長い時間を待ったのだろう事が知れる。
鞄から携帯電話を取り出して時刻を確認すると、既に夕方の六時を過ぎようとしている所だった。
（携帯……持ってるのかな）
ふとそんな事を考える。
彼女が持っているのなら、今すぐこの手の中にある携帯で連絡が取れるのに。
だが、彼女の様子からして、何か複雑な事情があるのは明らかだった。
携帯を持っているかどうかは勿論、操作が出来るのかすら怪しい。
四苦八苦している姿を思わず想像して、巧は小さく噴出した。
今夜はもう来ないのだろう。
待っていてもしょうがないと悟り、ゆっくりと公園を後にする。
家に帰ろうとして、どうしても必要な参考書を買いに行こうと思っていたのを思い出した。
そこらの書店にはなくて、街中で見つけたと友人に教えてもらったものだ。
（今から行ったら遅くなるな）
再び携帯を開いてはみたが、巧は武志の番号も、メールアドレスも知らない。
二人で過ごすのはまたなんだか億劫で、まぁいいか、とそのまま携帯をポケットにしまいこんだ。

一応急ぐ気はあったが、いざ書店に辿り着くと、必要以上にゆっくりと店内を散策している自分に気がつく。
理由は当然、時間稼ぎだ。
いつか、慣れる日が来るんだろうか。
無意識に彼を避けているのは、本当に母の件でわだかまりがあるからなんだろうか。
人間として、好きじゃないだけなのかもしれない。
浮かびかけた思考を、ぶんぶんと大きく頭を振って振り払った。
性格として欠点のあるような人間じゃない。
きっと幼稚で欲張りな自分に非があるのだ。
今日は、公園で彼女に会えなかったせいか、やたらとぐるぐると思考が巡った。
そんな事をしていたら、自宅アパートに辿りつく頃にはもう夜の八時半を回っていた。
「……ただい、ま」
一応、そろりと覗き込むようにしてドアを開けた。
心配、していたのだろうか。
食事を作ってくれていたのなら、冷めているかもしれない。
慌てて出てくるのではと思ったが、室内からの反応はない。
（……寝てんのかな）
居間に足を踏み入れて、ギクリとした。
開け放たれた扉の所に、武志が腕を組んで立っていたからだ。
「あ……武志さん？ただいま…あの、遅くなって」
「どこに居た」
言葉を遮るように、低い声が短く響く。
巧は一瞬、それが武志から発せられたのだと気付かなかった。
「……、え？……あっ…と、参考書を」
「どうして早く帰って来ないッッッッ！！！！！！！」

ビリ、と空気が揺れた。
巧はまるで凍りついたように、そのまま言葉と動きの一切を止めた。
その大声は、確かに目の前にいる武志から発せられたもので。
まるで人が変わったかのように、武志は激昂していた。
ただただ、驚きで呆然、としてしまう。
下手をすれば今何が起こっているのかも理解できないくらい、びっくりしてしまって。
これほどの怒号を人に向けられたのは生まれて初めてで、しかもそれが穏やかなはずの男だと言うのだから、頭が真っ白になっても無理はなかったと思う。
何も言わない巧に焦れたのか、ぬっ、と武志の手が伸びた。
かと思うと、その手は思い切り巧の髪を鷲掴みにして、そのまま這い蹲らせるかのように思い切り下へ圧をかけた。
「いッ……！！！！」
目を見開いたままで低く呻く。
ぶちぶちと、無理矢理髪が頭皮から引き抜かれる焼けるような痛みが走った。
「どこに居た。お前は不良な子だったのか？信じてたのにッ！！！」
「た、…武志、さん」
ようやく頭が状況に追いつく。
ただならぬ怒りを全身にぶつけられ、ドクドクと脈が速くなるのを感じた。
「信じてたのにッ！！！」
手が振りかぶられたかと思うと、バッ、と目の前に火花が散った。
体が一瞬浮いたような感覚がして、しこたま壁に頭をぶつける。
平手で思いきり殴り飛ばされたのだと、衝撃の後にゆっくりやってきた痛みと口内に広がる血の味でようやく自覚した。
驚きのせいではなく、ひどい動揺と早すぎる脈にドクドクと思考が飲み込まれていく。
見開いたままの目で見上げると、ふらつきながらまた武志が手を伸

ばしてきた。
反射的に腕で頭を庇うと、今度はその足が思い切り腿を蹴飛ばした。
「いァッ……！！」
衝撃で勝手に跳ね上がった足が、ちぎれるかのように痛んだ。
足も庇うように引きずりながら折り曲げると、今度は腹へと足が叩き込まれる。
「ぐっ…ふ…！！ぅ、や、…やめ！！！」
そこでようやく制止の言葉が口から零れた。
わからない。わからない。わからない。
何が起こっているのか。何故彼はここまで怒っているのか。何故殴られるのか。
勝手に震える身を自覚しながら腕の隙間から彼の様子を窺うと、再びその手がみしりと頭皮を引っ張りながら髪を掴んだ。
「痛えっ…！！」
「巧。連絡一つよこさない子は悪い子だ。わかるな」
顔が近づけられ、囁くように言葉が向けられる。
そこでようやく、彼の顔がひどく赤らんでいる事、そしてその呼気が濃いアルコールに侵されている事に気がついた。
「よ……酔って…る、の？」
「ごめんなさい、だろうッ！！！！！！！」
再び激昂。
ガッ、と顎先に強い衝撃を受けて、脳が揺れた。
ずるずると壁伝いに倒れこむと、容赦なく蹴りが背中や腹に叩き込まれる。
そこまでされても、巧にはわからない。何がわからないかもわからない、そう、とにかく、思考そのものが凍り付いてしまっていて。
助けを求めるように周りを眺めて、ここがアパートの部屋の中である事に気付く。それほどまでに、頭が真っ白だった。
とはいえ、怒鳴り声や物音は、室外にも響いているだろう。壁の薄い安アパートで、武志はひどく激昂している。

しかし、元々このアパートには母同様に夜職の人間が多く、夕方以降に明かりのついている部屋を見止められる事は滅多にない。
思考のストップした頭に、真っ暗だったほかの部屋の窓の景色だけがぼんやりと浮かぶ。
そのまま巧は、身を丸めて激しく与えられる暴力に耐える事しか出来なかった。

楓ー6

「ど、ど、う、した、の！」
ブランコから、落ちるかと思った。
いつもの児童公園、いつもの時間。
現れた少年は、口と目の端に絆創膏、手に湿布を貼っていた。
「大した事じゃないよ。大袈裟に手当てされちゃって」
少し不機嫌そうな口調で少年は呟き、いつものようにすとんと隣のブランコに座り込んだ。
楓は一人衝撃が収まらないまま、ぱくぱくと口を無意味に開閉させてひたすら少年を凝視した。
「だ、だ、だ、誰に、やられた、の」
「……」
問いかけに、むすりとしたまま少年は答えない。
「ちょっと……喧嘩、して」
問いとは違う答えがぼそりと返ったかと思うと、ようやく少年は少し笑った。
「……本当大したことじゃないんだよ。この手当ても、その相手がしてくれたやつだし」
「え、そう、なの、じゃ、じゃあ仲直り、した、の」
「仲直りって言うか……。なんか、泣きながら土下座された」
呟く口調はまだ不機嫌そうで、その言葉がジョークではないのがわかる。
どういういきさつなのかは知れずとも、とりあえず少年は変に落ち込んだりはしていないらしい。
どき、どき、とまだ痛いほどに胸が早鐘を打っていたが、とりあえず楓はほう、と大きく息を吐いた。
「もみじさんこそどうしたの。昨日俺待ってたのに」
楓が落ちついたのを見計らったように、少年がぼそりと拗ねたよう

な、照れたような口調で呟いた。
あ、と楓は小さく声を零す。
今日会えたら一番に昨日も来ていたのか聞いて、もし来ていたなら謝ろうと思っていたのに。
衝撃で、すっかり頭から飛んでしまっていた。
「あ、え、えと、えと、ね…」
すう、はあ、と深呼吸して、更に呼吸と気持ちを整えてから、楓は改めて少年を見た。
「やっぱり、来てた、んだね…ごめんね、あ、の、私、熱……出しちゃって」
「え！」
告げた言葉に思った以上に驚かれて、ついぱちくりと目を瞬かせる。
「じゃあ駄目だろ！こんな寒い所に居たら！何してんの！？熱ぶり返すって」
少し咎めるように続けられた言葉を聞いて、あぁ、そういう事か、と納得した。
心配してくれているのがわかって、純粋な嬉しさがじわりと胸に広がる。
「あ、大丈夫、だよ。風邪とかじゃ……ないの」
「え、そう……なの？」
「うん、最近は、ね、治ってきてたんだけど、熱が出て、頭痛がして、それで……。……精神的なもの、……かなぁ」
「……」
楓の台詞に、何かは察したはずだと思う。
だが少年は、それに突っ込んだ質問を投げかけようとはしなかった。
その距離感が心地よい、のだが。
（聞いてくれたら、言うのに、なぁ）
そんな事を考える自分は卑怯だろうか、と楓は思う。
だが、少年にならなんでも言える、という自分なりの信頼の確認でもある。

「まぁとにかく、……無理とかなしね。季節の変わり目は風邪引きやすいのも確かだし」
「う、ん、ありがと。でもね、学ラン君に会わないと、それも落ち着かない、んだぁ」
ぽつりと返すと、不意にしーん、と沈黙が落ちた。
あれ？などと疑問符を浮かべて少年を見ると、湯気立ちそうなほどに真っ赤な顔をしていた。
「あ」
（また、やった？）
思い返してみると、なるほど、恥ずかしい台詞を吐いている。
一緒に茹蛸になりかけたその時、突然声がかけられた。
「楓！」
驚いて振り返ると、スーツ姿の男が立っていた。
「お…おとう、さん」
思わず楓はバッ、と立ち上がった。
少年は、ただぽかん、として男と楓を交互に眺めている。
「何してるんだ、昨日熱出したばかりなのに」
「きょ……今日は早い、ね」
「お土産買ってきたぞ、早く元気になるように。……もしかしてそんな心配いらなかったのかな」
ボソリ、と付け足された台詞は、曖昧にしか聞こえなかった。
え？と問い返そうとして、父の視線が少年に向いているのに気がつく。
瞬間、無性に恥ずかしくなった。
秘密の逢引を見られたような。
そんな思考に更に恥ずかしさに一人悶える、無限ループだ。
「あ……えっとー……。すみません、俺、話し相手してもらってただけだから」
怒られるとでも思ったのか少年は眉を垂らし立ち上がったが、それを制するかのように、サッ、と父の腕が伸びた。

「はい」
「え？」
「お土産、君にもおすそ分けだ」
父は、少年へとシュークリームを押し付けるように渡して、踵を返してマンションの方へと足を向ける。
「冷えないうちに家に入りなさい」
楓に優しく言葉をかけ、そのまま離れていく姿を、楓はどこか呆然と見送った。
「あ、有難うございます！」
慌てたように、少年が隣で礼を告げる。
父はもう一度振り返って柔らかく笑うと、マンションの中へと姿を消していった。
数秒の間のあと、少年が大きく大きく息を吐く音が聞こえた。
「びっくり、した……怒られるかと思った」
「う、ウン」
なぜ怒られるのか、そんな事は恐らくどちらにもわからないが、そんな気がしたのだ。
少年が小さく笑う。
「腹減ってたんだ、食いながら帰るね。ありがとー、もう一回親父さんにも礼言っといて。心配してたしもみじさんももう帰った方がいいよ」
「あ、う、うん、そだね」
とりあえずはシュークリームを嫌いではないのがわかり、楓はホッと息をついた。
「あれが父親だよなぁ……」
ぽつりと呟きが聞こえ、問い返そうかと目線を向けた時には、既に少年は背を向けている。
「あ、ま、またね」
「あ、うん。またね」
慌てて向けた挨拶に、どこか上の空の様子で言葉が返ってくる。

少し心配ではあったが、早速むぐ、とシュークリームを頬張っているのが動作でわかった。
そんな様子に小さく笑い、少し安心した心地で、楓はマンションへと足を向けた。

巧ー6

（カエデ、って言うんだな。名前）
もぐもぐと甘いシュークリームを頬張りながら、巧はぼんやりとそんな事を考えていた。
渾名が案外本名に近かった事に、小さな笑いが込み上げる。
「イテ」
笑うとずきりと口の端が痛んだ。
楓の父親は、優しそうだった。
同じ優しそうなタイプの人間でも、理知的な、暖かさとかっこよさを合わせもつ雰囲気。
そうして巧はこれから、むしろ愚鈍さの前面に押し出された“優しい”男の待つアパートへ帰るのだ。
『許してください』
朝、目を覚ました巧が見たのは、そんな台詞とともに涙ながらに土下座する武志の姿だった。
見ていて呆れるほどに地面についた両手はぶるぶると情けなく震え、ぼたぼたと絨毯にしみこむ涙を汚い、と、咄嗟に思ってしまったのを覚えている。
武志の言い分だとこうだ。
帰ってこない巧が心配で心配で、恐ろしくなって、気がついたら不安を紛らわす為に酒を飲んでいた。
酒乱の気があるので、普段は一滴も酒を飲まない。
もう二度と、けして酒は飲まない。
約束する。
（……約束、ねえ）
そこは約束、ではなく、自分に誓えよ、と思う。
勝手に人を巻き込むなと。
普段以上に冷たい思考が頭を過ぎるのは、男をどこかで見下してい

るからかもしれない。
昨夜は確かに恐怖を感じた。
しかし、醜く泣きながら何度も何度も謝る武志に、呆れと苛立ちがゆるやかに戻ってきた。
あんな事は二度とごめんだから、酒を飲まないというのならそれでいい。
普段の武志は、“野暮ったく愚鈍そうな”優しい人なのだから。
「ただいま」
アパートに辿り着いて扉を開け、居間へと抜ける。
「あっ、お、お帰り」
おどおどとした武志に出迎えられて、また苛立ちのような男を見下す気持ちが胸に広がった。
「母さんは？今日は休みだったよな」
「あぁ、眞由美さんなら、ずーっと寝てる。よっぽど疲れてるんだね」
武志が指差すコタツの中で、母は丸まるような体勢ですーすーと寝息を立てていた。
結構な物音を立てて入ってきたというのに、寝息一つ乱れる様子はない。
「……あ、あの、学校、どうだった？何か、言われた？」
おどおどと問いかけられて、巧は目線を向けないまま上着を脱いだ。
「言われたよ。教師にも友達にもどうしたんだって。でも他校の奴らに絡まれたって言っておいた。金とかは取られてないって」
「そ、そ…う」
ほう、と大きく武志が息を吐く。
「あったかいココアでも入れるね」
途端に少し元気になってキッチンに行く男を、現金だ、と思った。
答えも返さないままに、コタツに座り込んでじっと母を見下ろす。
巧は眞由美が二十歳の時の子供だ。
眞由美は現在ようやく三十代半ばに差しかかろうかという年齢とい

う事になる。
友達に自慢できるほどの若さと美しさだと、巧は自負していた。
彼女のお決まりの台詞は「二十代にしか見えないって言われた」という若さ自慢で、本人も若いと思っているのが窺える。
いつまでたっても女ざかり、という印象だった、母。
……いつからこんなに、やつれたのだろう。
気付かなかった事実に、愕然とした。
化粧を落としているからだとは思うが、つやつやと張りのあった肌はくすんでボロボロで。目の下には色濃いクマが出来ている。昔はなかった小じわが目の周りに幾つか見える。
その顔は、青いを通り越して真っ白で。寝ているだけとわかっているのに、ついその口元に手をかざして寝息を確認してしまったほどだ。
佳織が入院してからというもの、一体どれだけ苦労してきたのか。
この姿が、全てを物語っている気がした。
弱い姿を見せない人なので、本当にギリギリの所まで来ないと気付けなかったかも、…気付かせなかったかもしれない。
そのことに、今更ながらぞっとする。
大袈裟ではなく、過労が人を死に追いやるのだと知っている。
「はい、ココア」
ことん、とマグカップが置かれて、巧はじっ、と武志を見た。
「……有難う、武志さん」
ゆっくりと、穏やかな口調で告げる。
許しを得たと思ったのか、パッ、と男の表情が輝いた。
この出会いは、恐らくまさに天の助けだったのだ。
武志は、眞由美の命を繋いでくれたと言っても過言ではない。
仲良くしなければ。
改めてそんな事を思う。
自分の感情でこの繋がりを駄目にしてはいけない。
もう一度母を見下ろして、密かに拳を握り締める。

傷の痛みさえ、どこかに吹っ飛んだような気がした。

楓ー7

休日が来た。
恐らく今日は少年は来ないだろうなと楓は思っていた。
楓の頭に写真のように飾ってある公園の景色にいるのは学ラン姿の少年で、私服の彼のイメージはない。
それでもついついなんとなく窓から公園を見下ろして、楓は小さく目を見開いた。
ブランコの所に、少年が座っている。
見た事のない私服を着ているが、その背格好は間違いなく少年のものだ。
もはや、学ランを来ていなくとも少年を判別できるくらいには同じ時を過ごした。
（どうしたんだろう）
考えながら、楓はごく自然に上着を着てマフラーを巻いた。
「楓、出掛けるの？」
「う、ウン」
迷い無く体が玄関へと向かう。
約束をしている訳じゃないし、互いのために公園に出向いている訳でもない。
…否、楓は少年のために公園に出向いているが、少年の真意はわからない。
それでも、行けば歓迎される確信があった。
根拠はないが、迷いもない。

「……あ」
マンションから公園まで駆け足で向かっていくと、途中で気付いた少年が顔を上げた。
少しはにかむように笑って、片手が挙げられる。

「……」
暖かそうなセーターに、少し緩そうなジーンズ。紺色のマフラー。学ラン姿ではない少年の姿はなんとも新鮮で、妙な気恥ずかしさを覚えた。
ともすればもじもじしてしまいそうな自分を押さえ込んで、楓も小さく手を挙げ返してから隣のブランコへと座った。
「どう、したの？休日に来るのって、珍しいね」
「え……あ、そうか、妄想の餌食にされてたくらいだもんね、俺。結構前から見られてたんだ」
「……そ、それ、忘れて……オネガイ……」
ぼふんと湯気を出した楓に少年がけらけらと笑う。
どこかでよかった、と思った。
ちょっとだけ普段より大人びて見える少年にドキドキしてしまって、無意味に赤くなる顔を誤魔化すのに必死だったから。
赤い顔への理由付けが出来て、ホッと胸を撫で下ろす。
「なんか……ちょっと息が詰まるっていうか」
「へ？」
「親父候補」
はふ、と大袈裟に息を吐いて少年が空を仰いだ。
それから少し困ったような眉を垂らした笑いを楓へとむける。
「今日、母さんは仕事だし……家に二人きりなんだ。仲良くしようって気になれたよ、嫌とかじゃないんだけど。なんかどうしていいかわかんなくて」
「……ナル、ホド」
私だったら、などと考えてみて楓はぶるりと一つ身震いした。
部屋は唯一安心できる自分の部屋なのに。
そこで他人同然の男と一日中居るだなんて、考えただけでずしんと肩やら頭やら重圧で重くなる。
「だから今日はちょっと病院に妹のお見舞い行ったり…色々して時間潰そうと思ってて。何気なく公園に来てみたらもみじさんが来て

くれた」
へへ、と嬉しそうに笑う少年に、また少し照れを色濃くしつつも楓もまた嬉しそうに笑みを返した。
気温は日々下がる一方なのに、むしろ少年といる時は暖かさが増しているような気さえする。
「あ、そういえばもみじさん知ってる？今年から、中央商店街でイルミネーションやるんだって」
「え？」
「街灯派手にしたり電球増やしたり……いつからだったかな、もうやってるはず。良かったら一緒に見に行こうよ」
問いかけられてドキン、と楓の心臓が竦んだ。
商店街。
この公園に出てきたのがやっと、という状態の今の楓にとっては、未だそこは行動範囲外という事になる。
距離にしてみれば歩いてでも辿り着けるほんの近場であるのに、まるで未知の世界の話をしているかのようだった。
「……あ、嫌だった？」
俯いてしまった楓に気付き、少年が眉を垂らして問いかける。
慌ててぶんぶんと首を横に振ってから、楓はぐっと強くブランコを握り締めた。
「……あの、…きょ、今日じゃ、なくて。……あの…だから」
「……えーと、じゃあ。……その内一緒に行こう。約束」
少年は小さく笑うと、スッ、と片手を差し出す。
「あ」
楓は慌てて手袋を脱ぐと、少年の小指に自らの指を絡めた。
繋がった箇所からじわりと熱が伝わる。
また顔が熱くなる。
「へへ、俺、楽しみにしてる」
少年となら、どこへだっていけるかもしれない。
ぶんぶんと緩く上下に絡めた手を振りながら、楓ははにかむように

小さく笑った。

巧ー7

（最近は随分日が暮れるのが早くなったなぁ）
空を見上げて、巧はぼんやりと白い息を吐いた。
まだ夕刻なのに、あたりはとっぷりと闇に包まれている。
夏ならまだまだ明るい時間帯だというのに、こう暗くなると随分遅くまで出歩いてしまったような気がする。
色々と無駄に足を伸ばして、さすがに潮時だろうとアパートへと向かって、憂鬱に沈み込みそうになる意識を息を吐き出す事でなんとか誤魔化そうとしていた。
武志と仲良くする。
自分の中で、そうしっかりと決めた。
早く、早く男に慣れたいと思う。
そのためにはたくさんの時間をともに過ごすのが一番なのだろう。
（何かお土産でも買ってくりゃ良かったかな。甘いものとか）
考え込んで、巧はアパートの扉を開けた。
「ただいま」
（甘いもの好きかな。見た目にはすきそうだけど。聞いとかないと駄目だよな）
思案しながら居間へと向かう。
そのせいで、一瞬気付くのが遅れた。

「ッ！！！！！」

ドッ、と、大きな圧力が突然巧の背中を襲い、気付けばその場に崩れ落ちていた。
何が起こったのかと背後を眺めると、赤ら顔をした武志がヒック、と一つ肩を揺らし、口角に厭らしい笑みを刻んで巧を見下ろしていた。

「……！？……酔……」
瞬間、どっと沸きあがったのは、恐怖だったか……怒り、だったのか。
こいつ。
（約束を……破った……！！）
土下座をして、涙までもを見せておきながら。
こんなにもあっさりと。
男は、まさに泥酔、といった様相をしている。
「なんだその顔は」
「うぐっ……！！！……っは…」
どす、と足が乱暴に腹に叩き込まれる。
涙目になって腹を押さえ悶絶しながらも、尚も巧は武志をにらみつけた。
「この、嘘、つき……！！！！」
「……いいか。お前が悪いんだ。どうして、帰ってこない？どこをほっつき歩いていたんだ」
「お前には、関係な…ッ、あ、あ！！！！」
じりじりと武志の足が、巧の腿を踏みにじる。
「お前が心配させるから僕は酒を飲む。お前が悪い子だから僕はこうして折檻する。全部お前のせいなんだ。お前のせいで僕がこんな事になっているんだッ！！！」
ひどい責任転嫁だと思った。
だが罵声を浴びせてやる事は出来なかった。
この前のようなひどい暴力が始まったからだ。
背中。腹。腿。容赦ない蹴りが叩き込まれて、巧はただ引き攣れたような醜い悲鳴を喉の奥で噛み殺す事しか出来ない。
（……）
身を縮めて必死に耐えているうち、ふと、気付いた。
武志の暴力が、この前と違う。
この前はめちゃくちゃだった。なんでもありだった。

頭を壁に打ち付けられたり、顔を殴られたり、手を踏みつけられたり。
それが今回は、背中、腹、腿、同じ箇所ばかりをローテーションするように衝撃が襲う。
その意味を理解して、巧の頭にカァッとひどい怒りが燃え上がった。
武志は、見えない箇所だけを攻撃している。
前の件を踏まえているのだ。
他人にばれない場所だけを、狙って攻撃しているのだ、この男は！
「か、母さん、に……ッ！！！！！」
怒鳴るように、声を振り絞った。
ぴたりと武志の攻撃が止まる。
ぶるぶると怒りに身を震わせて、うずくまったまま巧は武志を睨み上げた。
「母さんに、言う！全部、言う！あんたに暴力受けた事！」
「……なん、だって…」
「あんたは嘘つきだって！約束の一つも守らないって！酒乱のどうしようもない暴力男だって！！お前みたいな奴と、結婚なんかさせるもんか！！！」
全てを言い切り、巧はぜえぜえと肩で息をしながら、ただただ武志を睨みつけ続けた。
先ほどまでが嘘のように動きを止めた武志の表情はない。
その隙に逃げようと這うように腕を伸ばし、テーブルを支えに巧は身を起こした。
ドンドンと全身をノックされているかのような重たい痛みが断続的に体の内側から響く。
恐らく、後でひどい青あざになるだろう。
ふらりと武志がキッチンの方へと移動した。
相当堪えたのだろう。ざまぁみろと心の中で吐き捨てて立ち上がろうとした時、巧はそのまま大きく体を跳ねさせて、マネキンのように強張らせてしまった。

何かゴソゴソ動いていた武志が振り向いたかと思うと、その手に……包丁が握られていたからだ。
「もう一度、言ってみろ」
「……」
ゆっくり、ゆっくりと武志が近づいてくるのを見開いた目で呆然と見ていた。
後ずさりしたいのに、体は動かなかった。
「言ってみろッッ！！！！！！」
「ひ……ッ！！！！！」
包丁が振り下ろされた。
瞬間、死ぬのだと思った。
しかし包丁は巧ではなく、横に落ちていた巧のマフラーへと突き刺さった。
「言えッ！！！！言ってみろ！！！！！殺す！！！！コロスッ！！！！！舐めやがって！！！！くそが！！！！！」
ザクッ、ザクッ、と、切り裂くような音が耳の中で聞こえた。
実際そんな大袈裟な音はしないのだが、巧の頭の中でだけ聞こえる音と呼応して、巧の目の前でマフラーはボロボロに、ズタズタに引き裂かれていく。
（殺される）
（おかしい）
（おかしい、こいつは、おかしい！）
先ほどまでは怒りで震えていた巧の全身は、先とは全く違う種類の震えに支配されていた。
まともじゃない。男が何をしでかすかわからないと思ったら、本当に純粋な恐怖に完全に飲み込まれてしまった。
意味もなく悲鳴をあげそうで、必死で口を引き結ぼうとしてうまく閉じられないのに気がついた。
ガチガチと歯が鳴って、唇が痙攣するように震える。
「……、許してやってもいいよ、巧君」

突然、男の手がぴたりと止まった。
薄笑いを浮かべた男が巧の髪を鷲掴みにする。
「ひっ」
恐怖に抵抗すら出来ずにいると、そのままぐっ、と引き寄せられた。
ぐりぐりと力を加えられ、何事かとパニックを起こす頭で必死に考えて、ズボン越しに男の股間に顔を押し付けさせられているのだとわかった。
「しゃぶれ」
薄笑いのまま、武志が告げる。
「――――……」
まるで無垢な赤子にでもなってしまったかのように、巧は呆然と武志を見上げた。
本当に意味がわからなかった。
武志の顔から笑みが掻き消える。
「口で奉仕しろって言ってんだよォッ！！！わからねえほどガキじゃねえだろ！フェラしろって言ってんだよ！！」
「……ッ！！！」
激昂とともに刃物がキラリと光り、恐怖に喉の奥から引き攣った声が漏れた。
何をさせられようとしているのかはわかったが、混乱や戸惑いを感じる余裕はない。
ただ、命じられた事を受け止めて、そして巧は顔を歪めて涙を零した。
「で、でき、ない、許し」
「殺されたいんだなッ！！！！！」
「違う！違っ、か、噛んじゃ、う、から、できない…！！！違う、ご、ご、ごめ…！」
したくないとか、嫌悪とか、そんな感情さえ生まれなかった。
ただ、男の命に背くことが死に直結するのだろうと差し迫る恐怖で頭が一杯だった。

武志は黙って巧を覗き込み、そこでようやくガチガチと歯の根があっていない事に気がついたようだった。
「うぅっ！！」
背中を蹴られ、再びその場に崩れ落ちる。
四つん這いのような体勢になった巧の背に、ずしりと重みがかかった。
「巧君は、ＡＶとか見る？まだ早いかな」
「……」
後ろから刺されるのかもしれないと思った。
どう答えるのが正しいのかわからなくて、がたがた震えたまま首を横に振る事しか出来ない。
「アナルセックスって知ってる？」
「……」
「僕はそれが大好きで。ＡＶ借りてくる時は、必ずアナルプレイものを借りるんだよ」
何を話しているのか、わからない。
いつ、グサリと衝撃がきて、悲鳴をあげる事になるのか、来るか来ないかもわからない恐怖の予測しか頭にない。
武志の湿った息が耳にかかる。
ゆっくり伸びてくる手を振り払う事など当然出来ずに、ただ巧はじっと全身を強張らせ、その恐怖に耐えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5361p/

大切な狂気を君に捧ぐ

2010年12月25日17時54分発行